

## 【A児のかんしゃくへの対応について】

6月14日の訪問の際、かんしゃくに火をつけた張本人が私だったこともあり、対応の難しさを実体験しました。穏やかに遊んでいる時は笑顔がかわいい女の子ですが、一旦へそを曲げるとこでも動きませんね。しかし、このような子たちを望ましい方向に導いていくのが放課後等デイサービスの役割でもあり、成果が見られた際の喜びはスタッフにとってはもちろん保護者にとってもひとしおですね。

対応について、優先順位を考えた以下の3つの観点から提案します。

### 1 かんしゃくを起こさなくて済む環境設定を行う（主に、ひと・もの・こと・時間・場所など）

突発的なことへ対応することが難しいA児に、①いつ ②どこで ③なにを ④どうするか について「個別的に」見通しをつけてあげます。しかも、この内容は、利用が始まってまだ間もないしのさんのことを考えると、基本的には「一人のできる（する）活動」をスケジュールとして見える化（小さなホワイトボードに提示するなど）します。スケジュール化がうまくいかなければ無理をする必要はありません。（先日はかんしゃく後に、手芸作業を児発管さんが提示され、長い時間集中して穏やかに過ごすことができていました。彼女のアセスメントを読ませていただくと、ビーズを使った作業なども好きだと情報がありました。）

もともと彼女は**意に沿わないことが起きる→かんしゃく→人が意に添うように動いてくれる→自分の思い通り！**という誤学習を積み重ねてきていますので、まずは、来てから帰るまで、かんしゃくを極力起こさないで過ごすことができるよう環境設定することが優先順位の1番だと考えます。

### 2 かんしゃくがこれ以上大きくなるようにする

泣いて大声を出し始めたとき、移動できるのであれば**場所を移動する対応**を提案します。（学習室、事業所の外、近日常利用可能となる2階など）目的は、他児への泣き声刺激などの不快感やもの投げによる二次被害を防止するためです。送迎車内など、場所を移動できないところでのかんしゃくは、ある意味あきらめてください。不本意ではありますが、本人の要求を受け入れるしかありません。その代り、次に同じかんしゃくが起きないように、1で記述したかんしゃくを起こさない対策を事前に考えておくことに努力を傾けます。

移動した後の対応としては、基本的に何も刺激を与えずひたすら見守ります。そして、自分で落ち着いた後、本人に対し、どうすればよかったのかについて適切な行動を**短く口頭**で指導します。他児への謝罪や会話の完結なども落ち着いたあとで確実に行います。

しばらく（数か月）の期間は、まず、①かんしゃくが極力おこらないような環境設定に配慮をしつつ、②かんしゃくが起きたとしてもそれ以上大きくなるような対応を徹底し、事業所が本人にとって落ち着いて過ごせる場所、安心して過ごせる場所、好きな場所としてのインプットがしっかりできた時点で次のステップに進みます。

### 3 意に沿わない場面に会ってもかんしゃくを起こさない経験を積む

かんしゃくを起こす思考（考え方）のメカニズムは次のようになっています。

① 使いたいおもちゃを友だちが持っていて自分が使えない → 私に貸すのが当然なのになんで貸してくれないのだ？ → かんしゃく

これを、例えば、次のように変えてあげたいのです。

② 使いたいおもちゃを友だちが持っていて自分が使えない → 今は友だちが使っているので、自分が使えるようになるまで順番を待ってみよう → 他のことをして待つ

このように、思考の変化ができるようになるためには、人の行動の基本的な原理を踏まえておく必要があります。それは、「**強化の原理**」と「**弱化的原理**」の二つで、以下のようにそれぞれに二つのパターンがあります。

強化	① ある行動を行うことによって「本人にとってのメリット」が得られる	ある行動は強められます
	② ある行動を行うことによって「本人にとって嫌なこと」が解消される	
弱化的	① ある行動を行うことによって「本人にとってのメリット」がなくなる	ある行動は弱められます
	② ある行動を行うことによって「本人にとって嫌なこと」が増える	

この原理に沿って考えると、A児に関わる支援は、次の2点となります。

### ① かんしゃくの行動を弱める

A児から、かんしゃくの行動を減らしたい・弱めたいと思ったとき、かんしゃくを起こしても本人にとってのメリットがなくなるように対応する必要があります。つまり、かんしゃくを起こすことによって、自分の思い通りに対応してもらうこと（友達におもちゃを貸してあげるよう配慮することなど）を絶対に避けなければなりません。この対応をしようとスタッフ間で決めた場合には、たとえ、A児がどんなに泣こうが喚こうが、決して妥協しないことです。かんしゃくをおこすことで、自分にとってメリットがなくなれば、かんしゃくの行動は、必ず弱まっていきます。

### ② かんしゃくを起こさずにできた、「がまん」や「ゆずる」などの行動を強める

上記の思考のメカニズムにおいて、かんしゃくを起こさずに対応できた行動を強化するためには、できたことを大いに誉められたり、友だちからありがとうと言われたり、自分が喜ぶごほうびをもらったりすることが有効です。かんしゃくをせずに行動できたとき、思いっきり本人のメリットになることを繰り返し続ければ、必ずその行動は強められていきます。

かんしゃくを起こさない経験を積むために行う①と②の支援では、**あえて意図的に場面を仕組む**ことが必要です。

例えば、おもちゃの貸し借りの場面で、「我慢する」、「待つ」経験を積ませたいとき、事前に相手の子に、待たら貸してあげることを了解させておき（貸してあげるのはスタッフでもよいと思います）、A児が「おもちゃを貸して」と要求する場面を作り出し、実際に待つことができれば、できたことを**大いに誉めます**。がまんができた達成感とスタッフや相手の子どもから喜ばれるメリットを得ることが出れば、徐々にがまんしたり待ったりする行動が強められていきます。

さて、このような意図的な場面を仕組む支援っていつ取り組みが可能となるのでしょうか？

これを判断するためには、A児の**かんしゃくに関する記録**が必要となります。内容は、以下の2点です。

#### ① かんしゃくそのものについての記録

- ・いつ、どのようなきっかけで、かんしゃくが起きたか？
- ・そのかんしゃくに対して、スタッフはどのように関わったか？
- ・かんしゃくは、どの程度の時間で収束したか？

#### ② かんしゃくを回避できた記録

- ・（かんしゃくが起きてもおかしくない場面で）いつ、どのような回避（がまんする・ゆずる）をしたか？

#### 【記録用紙例】

日時	①or②	内容	支援	時間	記録者	備考
6/24 15:30	①	Tちゃんへのおもちゃの横取り	今使ってるよと制止→ 学習室へ誘導	7分	田中	
6/24 14:30	②	Sちゃんからおもちゃ貸し拒否	他の遊びに切り替えを 声かけ→受け入れ		田中	
...	...	...	...	...	...	...

この程度のレベルの記録で十分です。ただし、記録漏れがなく、起こったことはすべて記録しておく必要があります。この用紙は、日々記録している記録と一緒に書くと、あとで、データ整理するとき、他の情報がじゃまになりますので、かんしゃくのことだけを記録する用紙を別途準備しておくほうが使い勝手があります。また、どのスタッフでも、現場を確認した際にすぐ書けるよう工夫する、もしくは、一旦自分のメモ用紙に書き留めておいて後で転記する、ことが望ましいと考えます。

この記録を蓄積しておき、かんしゃくの頻度が今現在の3分の1になったときにとりくむとよいでしょう。

もし、このタイミングが、まだ取り組むには早くて、結果が全く出せそうにないとなった場合には、再度、頻度が下がったとき、改めて取り組むとよいと思います。

そして、このような取り組みを始める段階では、学校や家庭との連携がたいへん重要となります。私たち支援者が、子どもの成長で最終的に目指すのは、「一般化」です。ある場所だけでできるようになるのではなく、さまざまな場所、場面のできるようになることを目指していくことが大切です。そのため、家庭と学校、放課後等デイサービスとが情報共有を大切にしながら、支援関係者が一丸となって取り組みを進めていくことが必要です。